

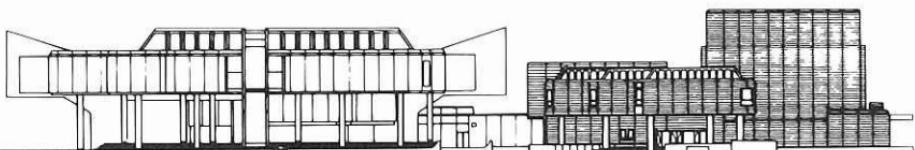
屈原詩「漁父」副島種臣筆（鍋島報效会蔵）

# 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

1 March 1999

No. 122



講演会要旨

「一衆人、皆酔う、我、獨り醒む— 副島種臣の人と書」



美術館一五周年企画展「副島種臣展—躍動する魂の書—」にともない、書家・評論家である石川九楊氏を招き、記念講演会を開催した。自身が書家である石川氏は、実際に黒板上で副島種臣の筆跡をなぞりながら、その表現の核心に迫るという手法をとられ、白熱した空気がみなぎる講演となつた。

以下は、本講演会の要旨である。当日の録音より、佐賀県立美術館学芸員・野中耕介が纏めた。

「衆人、皆酔う、我、獨り醒む」という、副島が書いた書がございまして、もともとは楚辞という中国の古い詩の中に出てくる文章でございます。今日はその題を借りまして、副島種臣の書について、それからその人となりについて、作品を手掛かりに考えてみたいと思っております。

副島さんの書について、「何か変わった字だなあ、だけど、何か魅力があるなあ」というのが、一番一般的な感想ではないかと思うんですね。結論から申し上げますと、私も中国、また日本の書をその起源から現在に至るまで見てまいりまして、それを見ながら、それぞれの関係と魅カについて考えてまいりました。そういう流れで申しあげますと、副島種臣の書というのは、これはまちがいなく、日本の歴史上で恐らく最も凄いという言い方もできるのではないかと思ひます。

書の世界では、例えば“空海（弘法大師）・大燈国師以来”という言い方をいたしますが、比較するのは時代が違いますから一概に言えま

書家・評論家 石川九楊 氏

せんが、副島の書はこれはもう、文句無しに凄い。更に、それは単に日本だけにとどまらず、書を生み、そしていつも日本に対して書というものを教えてきたような中国の書と比べても、これは相当なものであるということがいえるのではないか。

それから更にもう一つ、副島の書というのをヨーロッパも含めて考えた時に、実はヨーロッパの抽象画、カンジンスキーやモンドリアン、ミロなどよりももっと早いんですね。抽象絵画はヨーロッパで始まりますが、20世紀入ってからですから。まず雰囲気のある種のユーモアみたいなものがあるところ、また構成の原理なんかが似ております。そういう20世紀初頭のヨーロッパの非常に巨大な抽象画家以前に、その時代よりももっと先に、実は副島は抽象的な表現にまで進んでいます。芸術というものを世界的なレベルで考えた時に、やはり副島の書の存在というのには非常に問題になる、それ程の表現です。

この副島の書を見て、「何か変な字ね」という前に、もう少し、どういうふうに書かれているかということをご覧いただいて、それがその時代の中でどう登場してきたかということをお考えいただくと、副島の書、また古い過去の書というものをですね、どう見たらいいかということがはっきりするんじゃないかなと思います。

例えば副島種臣が登場する以前の時代はどんな字であったか。当時の政治家たちの字、例えば薩摩の西郷隆盛、大久保利通や木戸孝允などにみられるような、非常に粘りのある、粘着のある強い線ですね、その線でもって、草書体風に次から次へと文字を連ねていくという字体であった。

こういう字体の中に、副島種臣の字が突然現れてくる、その景色を思い浮かべていただきたい。そうすると分かりやすい。1880年代、西郷や大久保、一緒に明治の維新に働いた人達が書

いたこういうふうな字、副島自身も最初はそうだったんですが…。そういう中からですね、明治16年ぐらいに、実はミロやカンジンスキーのような、そういうふうな字までも生み出してしまう。その景色を想像していただくと、副島の書っていうのが一体どういう位置にあるかということがよくお分かりいただけるんじゃないかなと思います。

またもう一つ、よくよく考えていくとですね、東アジア漢字文化圏、つまり中国、朝鮮それからベトナム、それから日本と、この文化圏において一番中心になつた芸術、表現というのは何かというと、これは書なんですね。絵画や音楽でなく、書というものがその表現の中心を歩んできたと。実は今もそんなに変わっていない、それと対照的にヨーロッパは、クラシック音楽の凄い歴史があり、オペラがあります。ヨーロッパってのは実は音楽が表現と芸術の中心を歩んできた。ではなぜ東アジアは書であって、ヨーロッパは音楽なんだというふうに思われるかもしれません、それは実は言葉というものが、ヨーロッパとアジアでは違うからです。

例えば「しょうこう」と言った場合、「…今皆さんの頭の上にクエスチョンマークが見えましたけども（笑）」、「しょうこう」というのは、エレベーターの上り下りの「昇降」のことです。と、こういう言葉っていうのは実は西洋には無いんですね。どういうことかというと、我々の言葉というのは文字を話しているんですよ。し、よ、う、こ、う、という音を話しているんじゃないなしに、「昇る」に「降りる」という漢字の二字熟語を喋っているわけですね。聞く側も漢字で聞いている。要するに文字をやり取りしているわけです。そこで何が起こっているかといつたら、文字を喋った、文字を聞いたという事実がある。

私たちの漢字文化圏の言葉というのは、一番中心部分に何があるかといったら文字があるわけです。そうすると、その言語の下では、文字を中心とした表現というのが一番本質的な表現ということになる。それに対してヨーロッパのアルファベットというのは発音記号のようなものですから、音で聞いているわけです。音が言

葉の中心にある。

言葉というのは人間にとって一番本質的なものですから、ヨーロッパでは、声を中心としたところの音楽の文化が発達する。それに対して、文字を中心とした東アジアの文化というのは、書を発達させる。例えば中国の場合だと、宋の時代に、ほとんど西洋のクラシック音楽並みの、非常に複雑な表現の書がもう既に登場しているんですね。クラシック音楽並みの様々な展開の要素、盛り上がりがついていたり、盛り下がつていたりですね、突然転調したりというような表現が現れています。書というものは、実はそういうところまで表現出来るものである。そう言って間違いないだろうと思います。

そういう書の歴史の中で副島の書は、日本の近代、明治以降、現在に至るまで断然凄い。日本の書の歴史全体を見直してみても、中国を含めたとしても、凄い傑出しているという事がいえます。

副島の書について、少し他の人達がどういうふうに言っているか、それを拾い上げて参りました。

○藤原淳水：「副島の字は元熟の中では一番で

せうね、支那でもあれ位の字を書く人は近世には余りいない」

○梅園方竹：「変化があり雄大であるからまず一番でせう」

○井土靈山：「明治から維新にかけて型に入つていないことで一等である」

○西川一草亭：「日本人が書いた書で、あれ程偉大な感じを与へた物は無かつた」

○中川一政：「近代で自分は一番すきだ」

○北大路魯山人：「書家風の書を学んでおりながら…自己流であるかの如き自由さ」

○河東碧梧桐：「上古では弘法大師、近世では副島種臣が日本の書の書聖」

○大養 穀：「副島伯は一風格ある字を書いた。書はよくないが徹底していた」。

これらで特徴的なところはですね、「書聖」とか「偉大」「徹底」など、極限のところを旨指しているという事実。これが副島の書の特徴を如実に物語っていると考えていただいていいんじゃないかなと思います。これらをふまえてもう一

度、副島種臣の書に触れていただくと、その世界はもっといきいきとした形で見えてくるのではないかと思います。

じゃあ、どういうふうに書を見たらよいかが、書をやる人も書を見る人もなかなかよく分かりにくい。要するに、書の見方、書というはどういう芸術なのか、ということが上手く押さえられていない。そこが上手く押さえられていないと、どうしても書の前に立ってもですね、「何か字も読めないしなあ」ということになっちゃう。

書というのをどういうふうに見たら良いかということを、非常に簡単にですね、一番早道で分かっていたら方法、これは一つ方法があります。どういうことかというと、書かれてる字を指でなぞるんです。一番厳密には一番最初から一番最後まで。たとえ一部分でもいいから、その字を指でなぞってみる。そうすると、そこに表現されている書の世界というのがその場で実は浮かび上がる。マジックですよ、これは。

筆が紙の上を動いていく、その紙に接して動いていく、筆尖の動きが見える。そうすると、のそっ、と力なく書いているのと、サッと書いたのとでは全然違うのが分かりますね。そういうことが見えるように指でなぞる。書にはまず力というものがあります。力といつても強いだけじゃなく、ふわっと入ってくるような力もあれば、ぐっと突き込んでいくものもあれば、斜めにぎりぎりっと入り込むような力もある。いろんな力があります。まずそういう力を読み取る。それからもう一つ、書というのには、“打ち込む”という言葉があるように、奥へ向かうとうことがあります。

書というのはどういうふうな出来事かというと、この筆先と紙との力のやりとりの劇ですね。紙、正確には“対象”なんですが、ここは厚みもあれば、反発もある。その対象に対して書いていくんです。机の上など、しっかりしたものに置いた時に字が書けるということは、字が生まれるためにには実はここに対象、世界と考えてもいいわけですが、力をね返していく対象がある。こっち側（筆先）から力を入れてくると向こう側（紙）から力をね返してくれる、

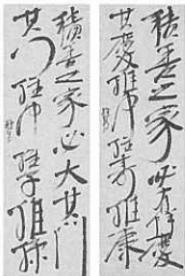
その両者の関係の劇、ドラマですね、書というの。例えば、拳を手のひらに強く打ち付ければ、これはぶれるくらいの力が戻ってくる。だけど軽くたたけば、ふわっとやさしい感触だけがこっちに戻ってくる。その代わりやさしい表現しか出でこない。そういう深さというものがある。奥に向かう深さがある。そして当然、速度があります。早く書いた場合とゆっくり書いた場合とで表現が変わってきます。このように書というのは基本的には力の芸術でありまして、それが深さと速さと角度というような表現を持っている。

なぞってみると書いている筆先の姿、さらに速度であるとか力であるとか、それがどういうふうに展開していっているかという姿がよく分かる。そういうふうな力、速度、深さ、角度なども含めて、なぞって下さい。こういうプロセスを踏まえて辿っていかれたら、恐らく大半の人は、書家がまさに書いている、その筆先が動いたかもしれない瞬間をここに呼び出すことが出来るわけです。何十年、何百年前の人が書いた、その動きがわかるんですね。そういうふうに見ていただければ、実は書というのはそんな難しくない。

書というのは、皆さんが書の前に立ってどう読み解いたらいいか手掛かりが無いから、難しいように思うだけの話でありまして、実際にこうして丁寧になぞっていかれると、その速度、その時の構え方の中から、ひょっとしたら、その作者はこんなことを考えてこうしたのかもしれないとか、そういうところがひょっとしたら見えるかもしれない。その書きぶりというのが目の前に蘇ってくる。それこそが、すなわち書です。だから書きぶりの美しさ、スタイル、或いは“たたずまい”といつてもいいですが、その書かれているもののたたずまいの美しさが書である。そのプロセスを丁寧に辿ることで誰でも分かる…というふうに考えてぜひ副島の書を見て、辿っていただきたい。

じゃあ副島の書に即してやってみましょう。

(ここで黒板を使用し、副島作品の筆跡をたどる。)



「積善之家」明治9年（1876、49歳）



「積翠堂」明治17年（1884、57歳）



「洗心亭」明治16年（1883、56歳）

もう少し丹念になぞっていけば全体が大体分かるんですが、この変な字と思っていたのが、ちょっと動いてきたでしょ。だから帰りにでももう一度作品の前に立たれて、速度が見えるんだ、力が、深さが、角度が見えるんだというふうに思ってなぞっていかれれば、世界がうわっと確実に蘇ってくる。だから明治が今、ここに蘇った。副島が今ここに降りてきたんですね、ちょっとだけ。

「積善之家」。明治9年初期の、中国に渡る頃の字ですけども、こういう字が明治13、14、15年ぐらいまで続きます。更に表現が拡大していくのが、「積翠堂」<sup>さきすいどう</sup>。どなたかここに出て来てもらって、ひとつここへ「積翠堂」と書いて下さいと、どなたも、こういう構成は思付かないでしょ？100年以上前に副島は現在の我々の発想も越えてたんですね。これは何を意味しているか。それは或いは、要するに既にもう他

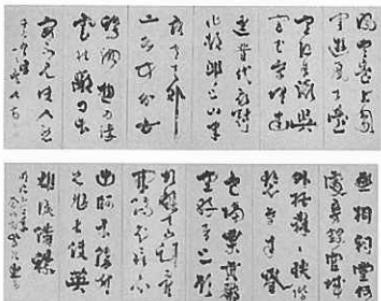
の人達とは違う形で書といもの、或いはその表現が見えたってことですね。ひとつの表現すべき世界が、この筆を下ろした時に既に読める。字が想定されてたってことですね。

副島は、今まで書かれてきたもの、書の基本的な成り立ちを一度壊したんですね。全部壊して新たに作り上げる。そういう形でこの明治16、17年代の書というのが成り立っている。とんでもない表現がいっぱいいまっているわけです。10年代、13年くらいまでのとは全然違う書き方ってのが明治16、17年くらいに現れてくる。それはもう、まったく一番最初に見たカンディンスキーかクレーの絵のような、抽象性で成り立っているような表現があつたりして、それで、それがもう一回肉を付けてきて、「積翠堂」とか「洗心亭」という表現になっていく。そういうふうになってくるとちょっと見逃せないでしょ。変な字を書く人、ではすまされない。

そして、「登金陵鳳凰臺」屏風になる。あれが明治25年の作でありまして、大体20年代、明治25年ぐらいた頃が一つのピークになっている。その時が物凄い、妻まじい摩擦を多用しながら、よいしょ、よいしょ、と筆を運ぶような字になっていく。

そして副島種臣のほぼ最後の書が「慎微」<sup>しんみ</sup>になるわけです。強靭な力を込めた筆触ではなくって、言ってみればあたかも折りのような、やはり少し枯れたというか、やっぱり水気を失っていくというところがあります。書自体はまた魅力があるわけですけども。

なぜ副島はこういう書を書いたか、書けるか。それは一つ作ったものを基本的に全部壊すから出来るのです。全力で一つ作ると、そしてそれをまた全力で壊す。だから二枚と同じものがないと言われますが、必ずできてきた後、できたと思った時にそれを壊す。で、その意味は、ひとつの仕事の延長線上に次なる領域を切り開くということです。副島はそれを無限回繰り返していました。だから絶えず自分が生み出していった、言ってみれば“自分”が対象であり、もっと言えば“世界”だし、副島の場合で言えば基本的に政治の世界とつながっている。



(上)李白詩「登金陵鳳凰臺」屏風 (下)杜甫詩「蜀相」屏風  
明治25年 (1892、65歳) 佐賀県立美術館蔵

要するに日本をどうするかという問題です。自分たちがおこない、自分たちが中心になつた明治の革命、新しい日本の國の政治をどういうふうにしようかというその時、副島は必ず目一杯で作って、自分が作ったものを更にそれを全部壊し、それを越えるかたちで、次のものを必ず出していく。無限の自己否定ですね。自分自身がつくり上げたものを絶えず壊していく。その無限に自己否定していくところに、実は本当の意味での自己の肯定がある。そこが副島の本当にすごいところである。書というものを本当の意味で彼はつかんでいた。それは無限の自己否定の連続からきているんだろうと僕は思うわけです。

最後になりますが、種臣が政治家としてどんな人であったかということについてお話しとかなきやならない。

副島を動かしたのは何かというと、要するに『日本一君主論』なんですね。その源は副島のお兄さんの枝吉神陽という人が、特に佐賀でそれを主張しました。江藤新平も大隈重信もその枝吉神陽の弟子なんですね。そして副島種臣もお兄さんの弟子なんですけれども、その人が天皇、要するに君主、『日本一君主論』、だから君主一人、あとはみな民だ。なぜかというと、中国型の君主というのは何かというと、必ず民のことを慮って政治をするしかないんです。こういう思想で動いてきてるんです。だから、一つの民

を慮る君主がいて、そして間に官僚はいなくて、そして少数の賢人が補佐すると。そしてその民はみな平等であるというかたちで、一つの政治、新しい政治のイメージを描いたんですね。それが明治維新に向かうエネルギーになったんです。

そのモデルは、実は当時の佐賀藩の中にありますて、藩主・鍋島閑叟公(直正)というのは、藩内で死刑が執行されると、その時には藩主が前の日から酒も断ってですね、その死刑囚のために祈ったということです。要するにそういう死刑囚というものを出すことに対する、藩主自身もその重みを自分も受けとめるというかね。ですから、おそらく副島もそういう鍋島藩のイメージを國のイメージにまで広げてるわけですね。

副島がやったのは主として外交の面ですけども、僕が思うので副島がやった一番大きな仕事で、一番大事なのは何かというと、副島が初めて、日本を中国と対等な国家に仕立てたということ。それは意外に思われるかもわかりませんけども、江戸時代までは、実は日本は中国のまわりに付録としてくっついているような国に過ぎなかった。これは形態としてもそうですね。そういう形できた日本を、明治6年の中国皇帝の謁見問題がきっかけとなるんですが、初めて中国から膽の緒を切って、日本は中国と同じなんだ、対等なんだということを認めさせた。この時に、日本は初めて実質的な意味で中国と対等になった。国と国とがどういうふうな位置関係にあるか、あるいはその理念は何なのかということを考えた時に、謁見時の礼を、属国の方式から「立札」方式に変えるということは、日本が中国と違う一つの国家として立ち上がるということをやっているわけです。

いずれにしても副島については、よく征韓論が語られますけれども、副島の一貫した政治行動の中から見えてくるのは何かというと、「外交」ですね。国と国との関係というもの、副島は国の境界線をきちっと引くことにものすごく拘った人です。

国と国とがどうあらねばならないか、それは、人間がどうあらねばならないか、ということと



「憤懣」明治37年（1904、77歳）

も関係するわけですが、副島はそういうことを考えた行動をとれた。実は、そういうものが明治の頃から死産のままで来てるんですね。だから副島が考えたような外交の問題についても、それから国の理想の問題についてもですね、実は、まさに現在でも当時と非常によく似ている面がある。その副島が理想とした社会といいますか、そういうふうな理想は、まだ有効に残っているのではないかと思います。

それを副島という一人の人間に引き寄せて考えた時に、どういう結論になるかというと、近代人の性格、これからも含めてですね、今これからの人間が生きていく資格というのは、僕は理想としては和心、和の心、漢、中国ですけど、漢の魂、それで『洋の才』ですね。明治以降の歴史がうまく捉えられなかったというか、ちょっとおかしなかたちで動いた。というのは何かというと、本当は日本語というのは、漢語というのは中国語ですからね。元々は漢字を使うということは、漢語からきているわけですから中国語です。日本語というのは、昔からあったかもしれない和語と、それに中国語、漢語を合わせて成り立っているわけですから、どうしても日本語というのは中国、漢の部分を消し去ることはできないんです。にもかかわらず、ある時から和だけがかかるかができるように考えて、『和洋才』『和魂漢才』などと言いましたけど、実は、和には魂なんて無いんですね。

和はむしろ心の方で、もっとふらふらして動くもので、そのふらふら動く心に対して、魂を入れるものは何かと言うと、やっぱり漢語であり、漢文であり、漢詩。要するに中国語の漢語の部分でないとなかなか魂が入ってこない。ですから『和心漢魂洋才』というのが一つの近代

人の理想。実は副島こそ、まさにその『和心漢魂洋才』の人であったというふうに僕は思うわけです。

副島の書がなぜああいうふうな、他の人が思いもつかないようなかたちで生まれてきたかといいますと、実は彼は凄い漢詩人がありました。それから、皆さんほんどご存じないかもしれません、実は副島には見事な和歌があるんですね。和歌集が残っています。それはほんど万葉集の世界ですね。万葉集から抜け出たような和歌を作っている。

彼の時代の基本的な教養では、何かものを言おうとしたらやはり漢詩、あるいは和歌で言うしかなかったわけですね。にもかかわらず、時代と共に歩む副島の精神、思いというものは、漢詩にも盛りきれないし、和歌にも盛りきれない部分があるわけですね。もやもやしたものが。やっぱり漢詩ではあまりにも類型的で、時代がかかりすぎるというものがいっぱいあるわけですね。実は、言葉にならないそういうものが“書”というかたちで吹き出していくわけですね。だから言葉にならないものが書に盛られていく。言葉にできるものは言葉で出でていけばいいのですが、言葉になり得ないものもあって、そういうものが筆触というか、書の書きぶりの中に生まれる。副島は、漢詩も凄かった、それから和歌も凄かった、だけども、そこに更に盛りきれないものが書の中に溢れていった、と。それがちょうど明治16、17年を頂点とする書に溢れていた。というふうに見ればいいのではないかと思います。

「衆人、皆酔う、我、獨り醒む」、これは<sup>（原作）</sup>雇原という人の一つの思いでありますけど、それはまた、副島の思いでもあっただろうと思います。

（文責 学芸員 野中耕介）

行事案内

日 誌

## 平成11年度常設展テーマ展示

[佐賀県立博物館3号展示室コーナー展示]

◆古代美術工芸展

平成11年4月6日(火)～5月16日(日)

◆佐賀の城下

平成11年5月18日(火)～6月27日(日)

◆古川松根の書画

平成11年6月29日(火)～8月8日(日)

◆チョウの世界

平成11年8月10日(火)～9月23日(木)

◆文明開化一絆一

平成11年10月13日(水)～11月21日(木)

◆昔の道具一これなんだ?一

平成11年11月23日(火)～平成12年1月9日(日)

◆高麗仏画の名品

平成12年1月11日(火)～2月20日(日)

◆肥前の中世文書

平成12年2月22日(火)～3月26日(日)

## 平成11年度常設特別展

[佐賀県立美術館2～3号展示室]

### 美術館は動物園

平成11年7月1日(木)～8月1日(日)

## 平成11年度佐賀県立博物館・美術館新収蔵品展

[佐賀県立美術館2号展示室]

佐賀県立博物館・佐賀県立美術館では日頃から自然史・考古・歴史・美術・工芸・民俗の各分野において、日頃から資料の調査、研究、収集、公開に努めています。

この展覧会は、そうした成果として、平成10年度に当館が購入・寄贈・寄託等によって収集した新収蔵品を一堂に展示・紹介するものです。



平成10年度佐賀県立博物館企画展

## 『有明海博物誌』記念講演会

演題 『偉大なり 有明海』

講師 筒井ガンコ堂(筒井泰彌氏)

[FUKUOKA STYLE編集長]

日時 平成11年2月20日(土)

会場 佐賀県立美術館ホール

主催 佐賀県立博物館

聴講 120名



『二人の人形の静物』 甲斐仁代 昭和12(1937)  
年<平成10年度新収蔵品から／美術館購入作品>

佐賀県立博物館・美術館報 第122号

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀市城内1-15-23 TEL0952-24-3947 FAX0952-25-7006

印 刷 (有)弘文社印刷

平成11年3月1日